

COVID 19流行開始時からのインターネット上の情報活用と情報リテラシー

著者	瀬戸山 陽子
雑誌名	聖路加看護学会誌
巻	24
号	1-2
ページ	47-50
発行年	2021-01-31
URL	http://doi.org/10.34414/00016513



【特集：COVID-19と看護実践】

COVID-19流行開始時からのインターネット上の 情報活用と情報リテラシー

瀬戸山陽子

I. はじめに

2020年1月16日に国内初の感染者（厚生労働省，2020）が発表されて以来，新型コロナウイルス感染症の流行は，だれもが体験したことがない社会変化をもたらした。インターネット上には当然膨大な情報があふれたが，医療系の教育関連の情報に関して，ソーシャルネットワークワーキングサービス（Social Networking Service；SNS）等を通じて，個別の体験知が集合知になっていく感覚を得た。集合知とは，広義には昆虫などの生命体の群れに宿る知であり，「個体の総計以上の知性（環境に適應する能力）が群れに発現する現象」（有馬，2019）をいうが，インターネット上の集合知は「見ず知らずの他人同士が知恵を出しあって構築する知」（西垣，2013）とされる。筆者の個人的な体験に基づくと，この半年のインターネット上の情報を振り返り，情報活用のための能力について考えたい。

II. COVID-19流行開始時から出現したオンラインコミュニティ

図1は，1月以降，筆者が触れた医療系の教育関連のインターネット上の情報をまとめたものである。系統的・網羅的なレビューではないが，情報発信者別に図のように分類された。まず上部2つは，発信者が教育行政や日本看護系大学協議会であるトップダウンの情報である。内容は，学内の感染対策からカリキュラムの調整，実習の考え方等，一定の方向性を示すものであった。対して図の一番下に示したのが，個人から発信された情報がSNSを用いたオンラインコミュニティで共有されたものである。たとえば，筆者が使用しているSNSであるFacebook上には，以下のようなものがあつた。

1つは，医療者が中心となって2月24日に立ち上がったCOVID-19 fighters（2020）である。ここでは，国内外・地域単位の感染状況や今後の感染拡大の見通し，医療機関での感染対策，“with コロナ”の日常生活など，COVID-19に関連するあらゆることが話題になった。このコミュニティは，すでにメンバーである人が承認する

ことで参加可能になる承認制で，メンバーのみが投稿を閲覧できるプライベートグループの形であった。6月中旬まではグループメンバーならだれでも投稿可能であったが，それ以降，山場を超えたとのことで役割が変わり，モデレータのみ投稿可能な形に移行した。10月時点でのメンバー数は，約7,900人であった。

オンラインコミュニティの2つ目の例は，新学期直前の3月30日に立ち上がった「新型コロナのインパクトを受け，大学教員は何をすべきか，何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」（グループ発足時の名称は，「新型コロナ休講で，大学教員は何をすべきかについて知恵と情報を共有するグループ」）（2020）である。これは所属や専門を超えた大学教員中心のグループだが，だれでも参加できる公開グループで，「職員や学生の方，さらには大学教育に関心を持つあらゆる方々を歓迎」とある。話題は，オンライン授業の具体的な方法から，オンライン授業システム，学生にまつわること，また大学教育関連の報道のあり方や非常勤講師への対応等，こちらも多様な内容が扱われた。10月時点でのメンバー数は約21,000人で，一時期より投稿回数は減ったものの，現在も参加者同士のやりとりが継続中である。

さらに3つ目は，看護教育に特化したオンラインコミュニティとして，看護教員の有志が4月16日に立ち上げた「看護実習を考える有志の会」（2020）があつた。グループ名には「実習」と入っているが，実際にはオンライン授業や学内演習も扱われており，相談事を投稿すると他のメンバーからの実体験や参照先が示され，やりとりが蓄積されていった。このグループも承認制のプライベートグループであり，10月時点でのメンバー数は910人であった。

III. 個別の体験知を集めて発信するキュレーター役割

個人発信の情報がオンラインコミュニティ上で共有されるものとは別に，個人の体験知を集めて整理する，いわば“キュレーター”の役割を担ったものもあつた。キュレーターとは，美術品などを収集して，それを整理し，展示・保存・管理する役割を担う人で，日本語では学芸員であり，昨今インターネット上の情報にもよく用いら

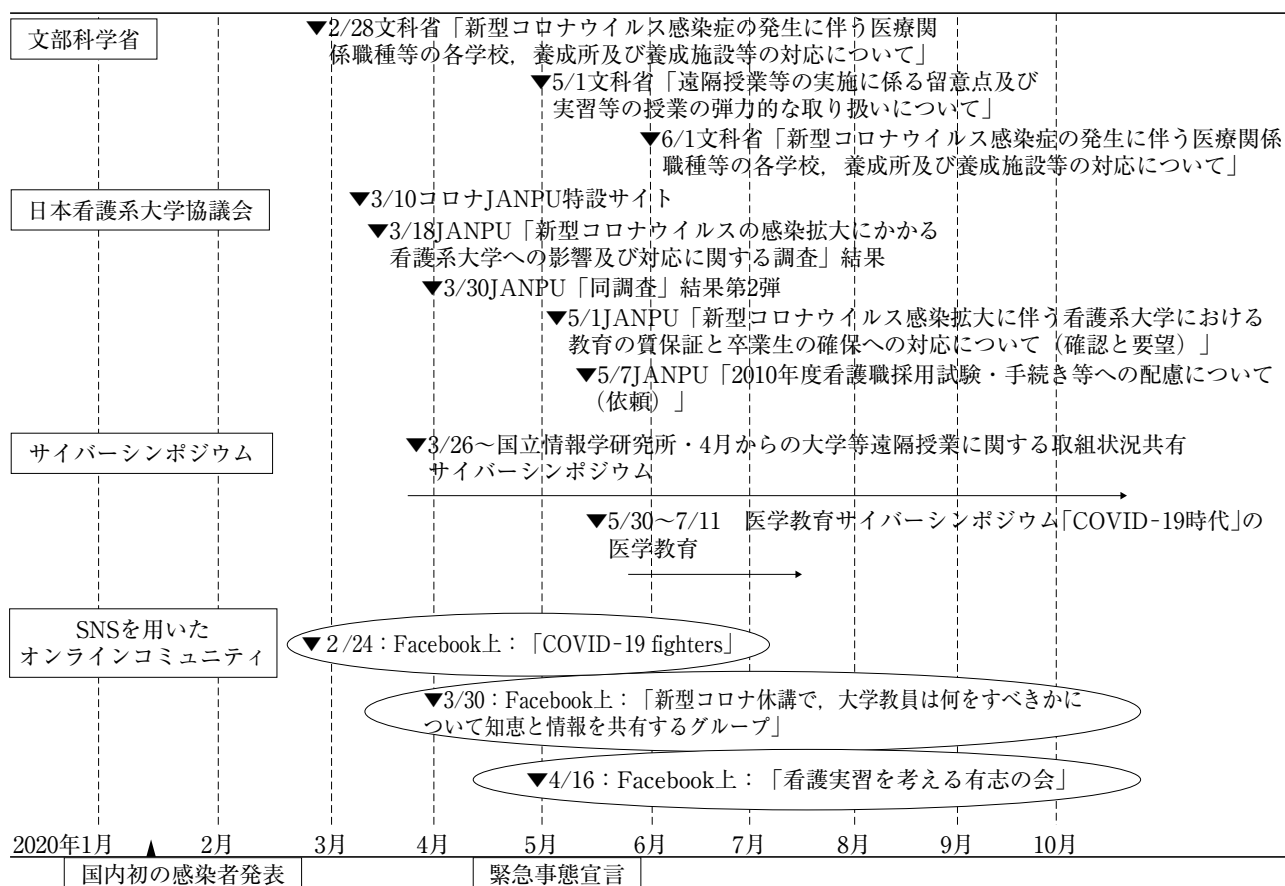


図1 医療系の教育関連のインターネット上の情報

れる。今般の事象に際して、その役割を担ったひとつが、国立情報学研究所が主催したオンラインのイベント「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」(2020)であった。

初回は新学期開始直前の3月26日で、その時点から、だれもが未経験の4月からの遠隔授業に関して、具体的な準備や懸念事項、それに向けた対策が惜しげもなく共有され始めた。このシンポジウムは、3月から5月にかけては週に1度程度、その後もほぼ2週間に1度のハイペースで開催され、本稿締め切り間際の10月23日にも、話題が「対面とオンラインのハイブリッド授業」にシフトしながら、第19回が開催された。毎回10人を超える登壇者が20分程度で話す内容は、さまざまな授業の実践例を始め、具体的なシステムの利用方法や、試験や評価、学生の通信環境やそれに負荷をかけないための大学側・教職員側の工夫、学生アンケートの結果や学生のメンタル面に関することなど多岐にわたった。オンライン教育が日本より進んでいる海外の教育事例や、学生からの発信もあった。しかもそのほとんどすべての映像と資料がネット上に公開され、だれでもアクセスできる。加えて、参加者からの質問はオンライン会議システムとは別のアプリケーションで共有され、こちらも後から閲覧できた。

また、参加者から次のプレゼンターを募る仕組みもあった。このようなリッチな内容をデスクにいながら自

由に視聴できるのは、非常時に必要に迫られてとはいえ、贅沢な機会であったともいえる。開催が昼食時間を挟む場合は、娯楽が準備されていることもあり(筆者は落語が好みでした)、怒濤の社会変化に必死になるなかで、「すぐに使える実践知」に加えて、心にアソビがもたらされた。

また、もうひとつ筆者にとって非常に有用であったものが、国立情報学研究所のサイバーシンポジウムの医学教育版である医学教育サイバーシンポジウム(2020)であった。国立情報学研究所のシンポジウムが、全領域、全学校を包含していたのに対して、医学教育サイバーシンポジウムは、各医学部の教員等が、COVID-19禍の医学教育に特化した実践例を共有していた。こちらは、5月30日~7月11日まで計4回、「これからの臨床実習」「試験」「卒後教育」「with Corona時代の医学教育」という医学教育特異的なテーマで開催された。こちらも無料で参加でき、質疑応答は別のアプリケーションで共有されるとともに、事後に資料と映像を確認することが可能であった。

IV. SNSの特徴と個人に求められる情報リテラシー

全世界が未曾有の対応に追われたこの半年間、医療系

を含めた教育関連の情報の流れをみると、トップダウンのものと同時に、個人由来の情報がやりとりされて、集合知がつけられる現象と、それとは別に、個人由来の情報が集められ、キュレーターを通じて必要な人に届けられるという現象があった。だれも経験したことがない社会では、専門家が話し合い一定の方向性にまとまった後に出される情報や、有用であることが証明され、さらに査読を経た情報を待てない場合もある。そのようななか、走りながら考える人々が体験知を発信する場であり、人と人をつなげる役割を担うインターネットは、重要な情報のインフラであった。

インターネット上では、その人がもつ関心事によって人と人がつながる「情報縁」が紡がれる。また、もともとは地域住民同士のつながりを表す社会関係資本はインターネット上でも醸成され、助けたり助けられたりする「互恵性の規範」や、人に対する「信頼」「市民的な参加のネットワーク」も生まれる(宮田, 2005)。さらにオンラインでは、対面のコミュニケーションよりも肩書きや見かけにとらわれない対等な関係を築きやすく、大学教育関連のコミュニティやシンポジウムには学生が参加し、発信をして、集合知づくりに貢献する現象がリアルタイムでみられた。では、このような情報インフラを活用する個人には、なにが求められるか。

American Library Association (2019) は、情報リテラシーを、「必要時に必要な情報を見つけ出し、評価して、それを効果的に用いること」としている。いま仮に目の前にすでに情報があるのであれば、その情報が信頼できるか評価する視点は、それをまとめた頭文字である「かちもない(いなかもち)」「書いたのはだれか、違う情報と見比べたか、元ネタや根拠はなにか、なんのための情報か、いつの情報か」が役に立つ(中山, 2020)。しかし現在は、専門家による見解も不確かで、つまり、確かな情報を見つけ出すことが難しい。そのようなとき、インターネット上で集合知がつけられるネットワークに参加し、膨大な情報をフィルターにかけて届けてくれるキュレーターとつながることで、価値ある情報を得やすくなる。また、インターネット上の双方向のやりとりでは、自らが発信するほど意味のある情報を入手しやすいため、相手にわかりやすくものを発信する力も、この時代に重要なリテラシーといえる。

しかし同時に、自大学の情報をどこまで共有するか、発信が組織としてか個人としてか等、発信者の意識も問われる。たとえばアメリカブラウン大学のソーシャルメディアのガイドライン(Brown University, 2020)では、教職員がインターネット上に投稿する際のガイドラインとして、自大学の学生や教職員に関する機密情報を開示しないことや、投稿前によく考えることが促されてきた。また投稿する際は身分を明らかにし、そのうえで、自大学の話をする場合、「投稿内容は個人的な考えであり、必ずしも大学全体の見解を表すものではないこ

と」を明記するよう定められている。これを機会に、自組織のガイドラインも確認したい。

先の American Library Association (2019) の情報リテラシーの説明には続きがあり、情報リテラシーを身につけた人とは、「学び方を学んだ人」だと記載されている。既存の知識が役に立つか判然としないとき、人となりが、リスクに心を配りながら自らも適切に発信し、情報縁を紡ぐ学び方が、未知の社会で健やかに生きるために重要であると思われる。

V. おわりに

昨今は、「コロナ禍」という言葉がすっかり定着した。しかし視点を変えると、たとえば、これまで多様なハードルに阻まれていたのに、社会の急激なオンライン化でさまざまなイベントがオンライン化され、社会参加しやすくなった人々がいる。その一方で、社会のオンライン化に新たな不便を感じている人々もいる。COVID-19が流行して以来、障害はその人の皮膚の内側でなく外側に存在すると考える「障害の社会モデル」という言葉を思い出すことが増えた。

必要に迫られてとはいえ、この半年間は、オンラインコミュニティで人とつながり、またキュレーターの役割を担う人や機関とオンラインでつながることで課題解決が促され、ときに意見を出し合って、明日からすぐ使える知恵を得た半年であった。それは情緒的な安定にもつながっていたように思う。今回立ち上がったオンラインコミュニティでやりとりし、その後個人的に繋がりを続けている人もおり、まさに情報縁を体験してきた。

COVID-19の流行が困難であることは間違いないが、これを機に自らの情報リテラシーを見直し、人とつながって有用な情報を得るとともに、自ら知恵づくりに貢献できるコロナエフェクトを体験する機会をもてるかもしれない。

謝辞

本文にも引用と共に示しましたが、未曾有の対応を迫られる社会において、個人の体験知を積極的に発信してくださっている方々、コミュニティを立ち上げたり、キュレーターの役割を担って、人と人をつなぎ、課題解決を推進する役割を担ってくださっている方々に、心から感謝申し上げます。

引用文献

- American Library Association (2019) : *Evaluating information ; information literacy*. <https://libguides.ala.org/InformationEvaluation/Infolit> (2020/10/21).
- 有馬淑子 (2019) : *集団と集合知の心理学* (初版). 176, ナカニシヤ出版, 京都.
- Brown University (2020) : *Social Media Guidelines & Best Practices*. <https://www.brown.edu/university-communications/social/guidelines> (2020/10/21).

- COVID-19 fighters (2020) : *COVID-19 fighters* (Facebook グループ). <https://www.facebook.com/groups/788377654986670> (2020/10/21).
- 看護実習を考える有志の会 (2020) : *看護実習を考える有志の会* (Facebook グループ). <https://www.facebook.com/groups/NursingPracticumJapan> (2020/10/21).
- 国立情報学研究所 (2020) : 4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム. <https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/> (2020/10/21).
- 厚生労働省 (2020) : 新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について(1例目). https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html (2020/10/21).
- 宮田加久子 (2005) : *きずなをつなぐメディア* (初版), 69, NTT 出版株式会社, 東京.
- 中山和弘 (2020) : *健康を決める力*. https://www.healthliteracy.jp/internet/post_10 (2020/10/21).
- 日本医学教育学会主催 : *医学教育サイバーシンポジウム「COVID19時代の医学教育」*. <https://cybersymposium.jp/> (2020/10/21).
- 西垣 通 (2013) : *集合知とは何か ; ネット時代の「知」のゆくえ* (第4版), 20, 中公新書, 東京.
- 新型コロナのインパクトを受け, 大学教員は何をすべきか, 何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ : *新型コロナのインパクトを受け, 大学教員は何をすべきか, 何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ* (Facebook グループ). <https://www.facebook.com/groups/146940180042907> (2020/10/21).